

高齢期の孤独と孤立、 そして他者との日常的交流



聖学院大学 心理福祉学部 特任教授

古谷野 亘

老いと孤独

孤独と孤立は、深刻な現代社会の病理です。日本で孤独の問題が改めて注目されるようになったきっかけは、2018年にイギリスで孤独問題担当大臣が任命されたことでした。日本でも2021年に孤独・孤立担当大臣が置かれ、内閣官房に孤独・孤立対策担当室が設置されました。時あたかもコロナ禍の最中で、外出と交流の自粛が求められ、人びとの孤独と孤立が特に意識されるようになっていたときでした。

孤独・孤立対策担当室は、2021年に初めての全国調査を行い、その結果を翌年4月に発表しました。それによると、孤独と孤立の問題が特に深刻なのは20代・30代の若年層においてでした¹⁾。

しかし、若い人の孤独が注目されるようになったのは比較的最近のことで、従来は老いと孤独がセットで語られることの方が多かったのです。それは、一般の人の意識においてばかりではなく、社会科学の研究においてもでした。たとえば、今では古典となった、イギリスの社会学者タンストールの『老いと孤独』²⁾が刊行されたのは1966年、その日本語訳が刊行されたのは1978年でした。

『老いと孤独』の日本語版が刊行された翌年の1979年、アメリカの社会学者シェイナスが、孤独な老人というのは神話だと喝破する論考を発表しました³⁾。実際には、ほとんどの高齢者が多くの他者(自分以外の人)に囲まれ、他者たちとの関係の中で生きているからです。シェイナスは、この「神話」はギリシャ神話の不死身の怪物ヒドラのように、否定され

ても否定されても出てくる厄介な代物だと言います。しかしシェイナスは、神話だから無視してよいと言ったのではなく、むしろそれを一つの仮説として、高齢者と他者たちとの関係(社会関係)についてさらに研究を進めるように勧めたのです。

人生の護送船団

シェイナスの勧めにしたがったものばかりではありませんが、高齢者の社会関係を扱った研究は、これまでに数多く発表されてきました。その中には、たとえば、サポート(支援)の提供者を選ぶ際のメカニズムを扱った階層的補完モデル⁴⁾と課題特定モデル⁵⁾があります。階層的補完モデルでは、他者たちの間には序列があって、その序列にしたがってサポートの提供者が選ばれると考えます。そして、優先順位の高い他者がいないか十分なサポートを提供できないときには、次の優先順位の他者が代わり、補完することになると説明します。他方、課題特定モデルでは、サポートの提供者を選ぶ際には課題の解決に適しているかどうか重要なので、特定の課題に対するサポートには特定の続柄の他者が選ばれると考えます。課題特定モデルは「遠くの親戚より近くの他人」という考え方、階層的補完モデルは「近くの他人より遠くの親戚」とする考え方だと言ってよいでしょう。

個人を取り巻く他者たちの中には、サポートの提供者として頼りになる人もいれば、頼りにならない人もいます。また、生涯にわたって交流が続く人もいれば、ひとときの付き合いで終わる人もいます。そのような生涯にわたっての他者との関係を説明する図式とし

て提案されたのがコンボイ・モデルです⁶⁾。コンボイというのは護送船団を意味する海軍用語です。非武装の輸送船が駆逐艦などに守られた船団を組み、港から港へと旅するように、他者たちに守られつつ、危険に満ちた人生の航路を進むのが人の一生だということです。

コンボイは個人を中心とする同心円として書き表されます(図1)。中心からの距離は親密さと重要さを表し、個人にいちばん近い内側の円には、全人的な付き合いをする家族や一部の親友、個人から遠いところには職務や役割のうえでだけ付き合う他者が位置します。内側の円にいる他者との関係は、その人が生きている限り生涯にわたって続くのがふつうですが、外側の円にいる他者との関係は、職務や役割が変われば、なかば自動的に消滅します。そのため、内側の円の他者はあまり変わりませんが、外側の円の他者は、職務や役割の変化に応じて入れ替わっていきます。

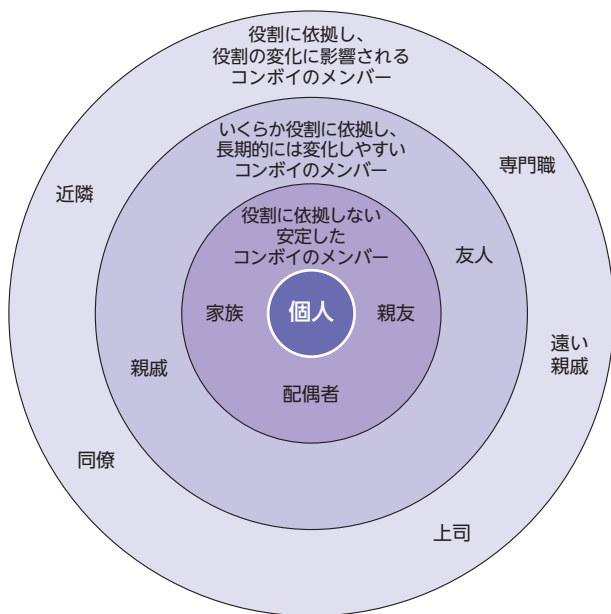


図1 コンボイの構成
出典：引用文献6).

日本の高齢者の社会関係

日本では、高齢者の社会関係についての研究は家族の研究として始められました。高齢者の生活の

中では家族との関係が特に重要だと思われていたからです。1970年代までの研究の多くは、子どもと同居している高齢者には安定したサポートの提供者がいるのに対して、別居している高齢者は必要なサポートを得にくいという暗黙の前提に立っていました。その後、別居子を視野に入れて世代間の交流やサポートを扱う研究が行われるようになり、1980年代以降は近隣や友人なども視野に入れた社会関係の研究へと発展していきました。

浅川らは、高齢者の社会関係を構成する2つの基本的な次元(あるいは側面)を発見し、それを「サポート」と「情緒的一体感」と命名しています⁷⁾。「サポート」は支援の授受によって代表される人間関係の次元、情緒的一体感は「一緒にいてほっとする」などの親密さの次元です。他者はこの2つの次元でそれぞれの位置を与えられます。

図2は、さまざまな続柄の他者の平均的な位置を示したものです。配偶者、特に妻は、いずれの次元でも大きな値を持ち、サポートの授受を行うと同時に情緒的一体感を感じられる重要な他者です。情緒的一体感の次元で配偶者に次ぐのは娘です。特に別居の娘は、サポートの次元では同居の娘に遠く及びませんが、情緒的一体感の次元では同居の娘を上

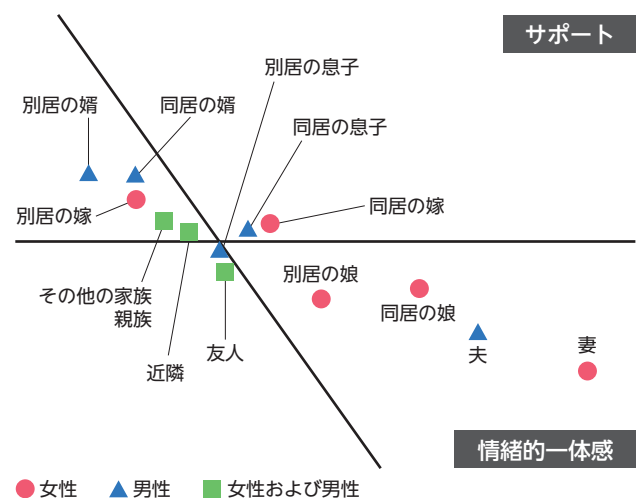


図2 続柄別にみた他者の相対的な位置
出典：引用文献7).

回っています。老親からみたとき、サポートの授受がなくても、別居の娘は息子や同居の娘以上に“かわいい”ということです。

サポートの次元を「ちょっとした用事をしてくれた」、情緒的一体感の次元を「一緒にいてほっとする」で代表させ、続柄別に該当する他者の割合をみると図3のようになります⁸⁾。ほとんどの続柄の他者で、「一緒にいてほっとする」人の割合が「ちょっとした用事をしてくれた」人の割合を上回っています。これは、「一緒にいてほっとする」ような親密な関係にある人の一部との間で、サポートの授受が行われることを意味します。きわめて自然な人間関係のあり方だと言ってよ

いでしょう。唯一の例外が同居の嫁で、親しさを欠いたままサポートの授受を行うという不自然な関係になっています。しばしば指摘される嫁と姑の葛藤は、このような不自然な人間関係のあり方から生じているのです。

周囲の他者との日常的な交流

学校を卒業するまで、多くの人は友人と毎日のように会っています。しかし、卒業していわゆる社会人になると、友人と呼べるような他者と会う機会はほとんどなくなります。ほとんどの人が毎日多くの他者と会っているのですが、家族・親族を除くと、「一緒にいてほっとする」ような親密な関係にある人と会う機会は、じつは多くないのです。

筆者らは、高齢者が毎日の生活で出会い、交流している親族以外の他者の分類を試み、「目的内関係の他者」「場を共有する他者」「特に親密な他者(友人)」という3つのタイプがあることを明らかにしました⁹⁾。「目的内関係の他者」とは、職場の同僚、医師・看護師、店員など役割関係にある人です。このタイプの他者との関係では、交流そのものが目的ではなく、何らかの目的を達成する必要から、必要の範囲内で交流することになります。「場を共有する他者」とは、特定の場所や場面を共有している人で、公園や病院の待合室で会う人、生涯学習のクラスで一緒の人、近所の人などです。

一般に「友人」と呼ばれる「特に親密な他者(友人)」は、ほとんどが「目的内関係の他者」か「場を共有する他者」として知り合った後に、何らかの経緯を経て一定水準以上の親しさを感じるようになった人です。「職場の同僚であった友人」「学校時代の友人」などがその例です。

小規模なパイロットスタディの結果、大都市に住む65～74歳の高齢者66人は、3日間に合計1,445人の他者と交流していました。交流のあった他者の中で最も多かったのは「目的内関係の他者」(63.0%)

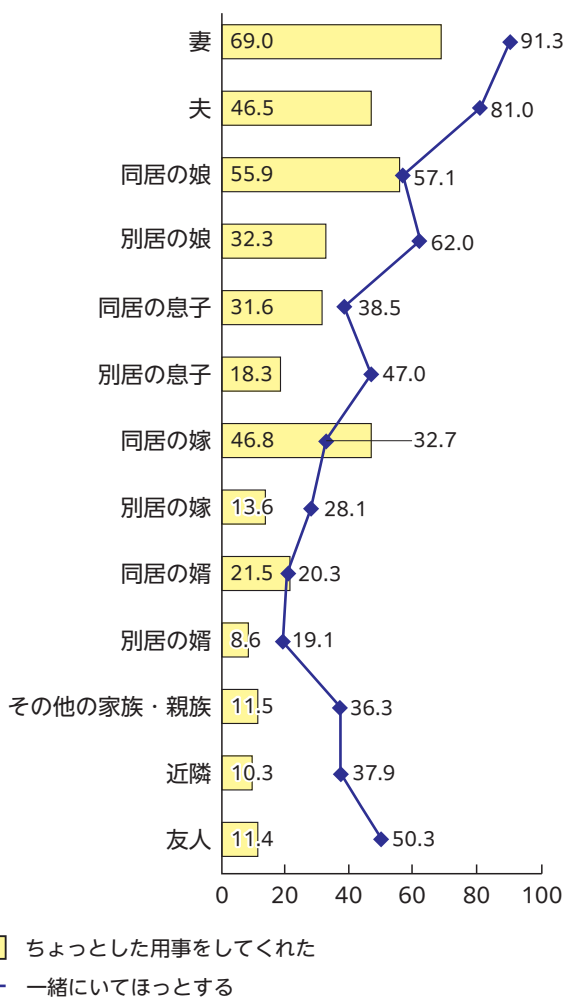


図3 情緒的一体感を感じる他者とサポートを提供してくれた他者の割合
出典：引用文献8)より作成。

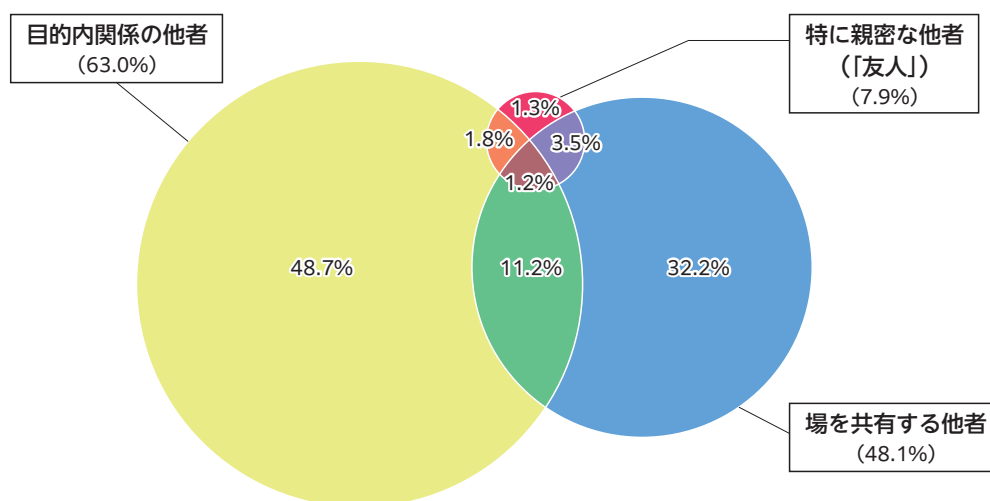


図4 高齢者が日常生活において交流している他者の分類
出典：引用文献9).

で、「場を共有する他者」(48.1%)が続き、「特に親密な他者(「友人」)」は7.9%のみでした(図4)。

一般に、教育課程を終えることを「社会に出る」と言い、教育課程を終えた人を「社会人」と呼んでいます。しかし、これは誤りです。人は誰でも、両親を含む他者たちの中に生まれ、他者たちとの関係の中で生き、老い、そして死んでいくからです。その意味で、人間は、生まれてから死ぬまで、あるいは死んだ後も、常に“社会人”なのです。

その社会人としての人生を長く送ってきた高齢者が、毎日の生活の中で、どのような人と出会い、どのような交流をしているのか、そしてその交流が本人にどのような影響を及ぼしているかを知ることは、超高齢社会をよりよいものにしていく上で重要な基礎的情報になります。高齢者の社会関係はこれまでずっと社会老年学の主要な研究テーマであり続けていますが、扱われてきたのはもっぱら家族や特に親密な他者との関係で、高齢者が毎日の生活で出会う、必ずしも親密であるとは限らない他者との交流には、今ようやく近づき始めたところです。

【引用文献】

- 1) 内閣官房孤独・孤立対策担当室：人々のつながりに関する基礎調査(令和3年)調査結果の概要。(2022)。
- 2) Tunstall J: *Old and Alone; A Sociological Study of Old People*. Routledge & Kegan Paul, London (1966), (光信隆夫訳：老いと孤独；老年者の社会学的研究。垣内出版，東京，1978)。
- 3) Shanas E: Social myth as hypothesis; The case of family relation of old people. *The Gerontologist*, 19: 3-9 (1979)。
- 4) Cantor MH: Neighbors and friends; An overlooked resource in the informal support system. *Research on Aging*, 1: 434-463 (1979)。
- 5) Litwak E: *Helping the Elderly; The Complementary Roles of Informal Networks and Formal Systems*. Guilford Press, N.Y. (1979)。
- 6) Kahn RL, Antonucci TC: Convoys over the life course; Attachment, roles, and social support. *Life Span Development and Behavior*, 13: 253-286 (1980)。
- 7) 浅川達人, 古谷野巨, 安藤孝敏ほか：高齢者の社会関係の構造と量. *老年社会科学*, 21: 329-338 (1999)。
- 8) Koyano W: Filial piety and intergenerational solidarity in Japan. *Australian Journal on Ageing*, 15: 51-56 (1996)。
- 9) 古谷野巨, 澤岡詩野, 菅原育子ほか：高齢者が日常生活において交流している他者との関係；その分類と把握. *老年社会科学*, 38: 345-350 (2016)。